

# カトリック六甲教会 教会報

2008

9

No.441

一つになろう

J. マシア

東京から米子まで飛行機で飛んだ時、富士山の北側を通り、雪を被った富士山を初めて上から眺めることができました。とても感動しました。それは新幹線の窓から眺める富士山の姿とは違います。川口湖から見た富士山ともまた違います。日本の代表的なこの山を描いた安藤広重の絵が浮かんできます。物事を多くの観点から見れば見るほど、その全体の姿がよく把握できるようになるものです。しかし人はたびたび物事を二つの極端な観点から見て、あれかこれかという二分極のものの考え方をすることが多いのではないのでしょうか。

最近ではコンピューターのおかげで、そういったものの見方が強まるのではないかと懸念されています。「白か黒か」、「イエスかノーか」と、そうでなければわからないというように物事を考えると、人々の間の意見の相通が難しくなります。教会の中でもこうした問題に直面することがあります。その解決のために、次の例え話から示唆を受けたいと思います。

ある小教区で、刷新を目指して信徒大会が開かれました。その時、話し合われた内容を伺うと、信徒が三つのグループに分かれていたことが明らかになります。それをA組、B組、C組と呼ぶことにしましょう。A組はこう主張しました。「私たちの小教区の刷新を実現するためには、まず何よりも祈りが大切だ。私たちは、これから、典礼を一層良いものにしていかなければなりません。」それに対してB組が言いました。「祈りは結構ですが、私たちと神との縦の関係だけを強調するだけではもの足りません。私たちと社会との横の関係を忘れてはなりません。そのためにもっと社会活動を大切にする必要があります。」

それに対してC組は言いました。「祈りも活動も結構ですが、私たちの信仰の理解を深めなければ、両方とも浅いものになりかねません。従ってもっと要理の勉強に励みましょう。」

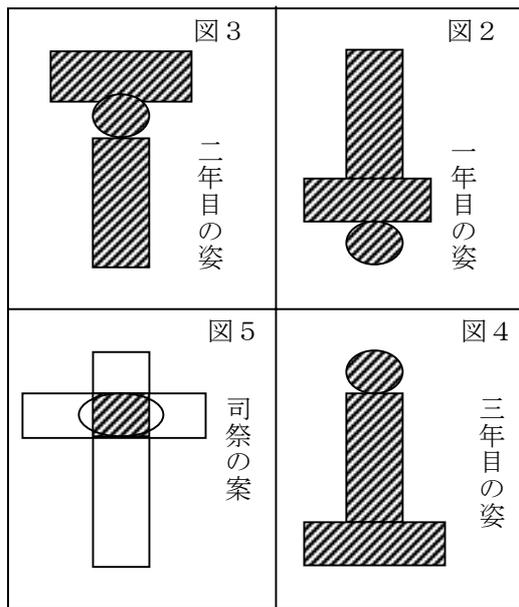
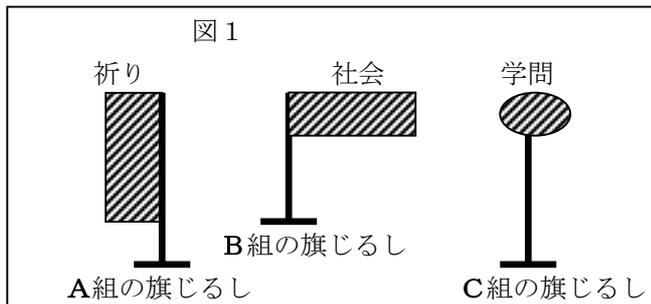
このようにして図面1のようにその小教区の信徒たちは三つの旗印を立てました。

主任司祭は、信徒たちがやっていたことを黙って見ておられました。その年はA組の人が会長になり、その後の一年は一番目の旗印の路線で教会が動くようになりました。二年目はB組、三年目はC組のやり方ということになりました。その間、主任司祭は黙って見ておられました。四年目になると皆、疲れてきました。ある年配の信徒は言いました。「このままだとまた同じことの繰り返しになるのではないか。刷新などはもういやになりました。」そこで意見が一致しないで、信徒たちは主任司祭の意見を求めました。水戸黄門のような主任司祭でしたが、しばらく考え込んでから彼はおもむろに言いました。「みなさん、この三年間にそれぞれのグループが使った旗印を持ってきてください。」信徒がそれを持ってくると、主任司祭は三つの旗印を机の上に一つずつ重ねていき、図面5のような十字架の形を作りました。「みなさん、祈りが活動か、活動か勉強か、勉強か祈りかという割り切った考え方を止めましょう。三つの旗印がともに重なり合っているところがあるのではないのでしょうか。丁度そのところからコミュニケーションが始まり、そこから刷新も行われます。ただし、重なり合っていないところがあるので、あくまでもコミュニケーションの難しさが残り、十字架の苦しみがあります。これから手を取り合って、教会内部のコミュニケーションをより良いものにしていきましょう。」

注

なるほど信徒の祈りと行動と信仰の理解は互いに育て合うものです。教会は使徒行録(2, 44-47)の中でルカが描くような源泉に立ち返る必要があります。「祈ること」、「社会の中で信仰を实践すること」、そして「信仰の理解を深めること」は密接に結びついているはずで、その三

つの中の一つを除くと他の二つが成り立たないのです。このことを忘れると、刷新は一方的になり、極端から極端に揺れ動く教会で皆疲れてしまい、刷新はいつまでも行われません。教会内部の円滑なコミュニケーションづくりに励みたいものです。



※ 使徒行録 2. 44-47

信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして、毎日ひたすら心一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事し、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。



# 信徒の教会づくり

私たちの「信徒の教会づくり」を考えていくために、いろいろな方に様々な考えを述べて頂くコーナーです。ご自分の思うところを投稿頂き、みなさまの意見の交換の場になれば、と願っています。

## 信徒の教会を考える

船井

今朝（7月31日）家を出て、今は中央線の一遊子。列車「信濃」は中津川を過ぎて、木曾福島へ。山あいの緑はいよいよ深く、沿線を通れる川は清流の趣きを深める。森の緑はわが心を鎮め、ひとり旅する自分は思考をふかめる。用あってこの度信州松本へ旅立った。車中、広報部から依頼があった「信徒の教会」寄稿の内容を黙考し、この小文をしたためました。

19世紀英国の文豪ディケンズは、「二都物語」の冒頭で1775年の世相を次のように描きました。「それはおよそ善き時代でもあれば、およそ悪しき時代でもあった。知恵の時代であるとともに、愚痴の時代でもあった。信念の時代でもあれば、不信の時代でもあった。光明の時でもあれば、暗黒の時でもあった。希望の春でもあれば、絶望の冬でもあった。前途はすべて洋々たる希望にあふれているようでもあれば、また前途はいっさい暗黒、虚無とも見えた。人々は真一文字に天国を指しているかのようでもあれば、また一路その逆を歩んでいるかのようにも見えた。—— 要するに、すべてはあまりにも現代に似ていたのだ。」

列車「信濃」は森の中をゴトゴト走る。昨日のA氏葬儀ミサのことが思い出される。「故人は亡くなる直前、“神さまのもとに行けるのが楽しみ”と語られた。」との神父の話が強く心の中で埋み、火のように消えません。携えた文芸春秋の記事に、死を前にした正岡子規が「悟りという事は、如何なる場合にも平気で死ぬる事かと思つて居たのは間違いで、悟りという事は、如何なる場合にも平気で生きて居る事であった。」と言つたという有名な言葉が出ていました。「神さまのもとに行けるのが楽しみ」とは、正に「平気で生きている事」に他なりません。「平気で生きている」ことと

は何でしょうか。マタイ 11・28 にイエスが「疲れた者、重荷を負う者はだれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの轡を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの轡は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」と言われたことにヒントがあるのではないかと思います。「神への信仰」「神とともに生きる」ということが、わたしたちが「平気で生きて行く」ことではないでしょうか。そして、「平気で生きて行く事」がわたしたちの「信徒の教会」を考えるうえでの「通奏低音」になるのでありましょう。

先日当教会で行われました、聖トマス大学の五野井先生の「ペトロ岐部他 187 名列福記念講演—日本人とキリスト教との出会い」では、信仰を拓めるにはその「時代背景」が大きな要件としてあげられていました。「時代が変わったから」「グローバリゼーションの世の中だから」「新しい時代に向けた」とか、わたしたち信徒の信仰生活、布教活動の中で語られます。時代が変わったから真理が変わる訳でもないことは当然ながら「変わった」、「変わる」世の中で、如何なる方策でその信徒の義務を具現して行くのかが問われることになりましょう。

私が会社生活現役の頃、企業が生き残る為には研究・開発が大事であることがよく言われました。研究・開発というのは、3 年先、5 年先あるいはもっと先に実現せねば、企業の将来の生存が保障されないといった難しい課題であります。この研究・開発が成功し、大きな花が咲くものは、「これは将来こうなる、あるいはこうあらねばならない。」と云った信念に基づき、社内の指示を取り付けながら推進されたものに多くありました。その時代、その時代の浮ついた世の状況に流されていたら、決して実現していなかったと振り返って見て思ったものであります。つまり、こうした研究・開発は、いろんな条件、環境が人為的あるいは偶然に整ってこそ実を結び、企業というのが永続して行きます。それらのポイントを述べますと、

- ① 研究・開発の必要性への信念。
- ② 時代の変化、環境の変化に対する的確な読み。
- ③ 企業の中での理解を得る努力。
- ④ 研究・開発活動の自由、自主性の確保。
- ⑤ 研究者、部門への相応な報奨。

「信徒の教会」を考える場合、上記の諸要件は参考になるのではないのでしょうか。つまり、

- ① 信徒個々の役割（タレント）の自覚と信念。
- ② 四囲を包む現在の環境と将来への読み。
- ③ 教会全体（小教区、教区等）への理解、協調を得る努力。
- ④ 信徒自身が活性化されるような自主的環境の整備の必要性。つまり、教会が、神父が、司教が「こう言った」からでは必ずしも活性化しない。
- ⑤ 信徒への報奨は神さまからいただけます。

近頃、情報公開「ディスクロージャー」ということがよく云われる。これを「開示」と云う。17 世紀にイエズス会が刊行した「日葡辞典」に「CAIJI」の項目で、「深遠な事柄を教授したり説明したりすること。仏法語」と解説されている。「あなたがたはキリストの体であり、また 1 人ひとりはその部分です。」と使徒パウロがコリントの教会への手紙（12・27）で言っています。わたしたちはそれぞれのタレントを活かし、信徒としての「開示」活動にモラルをもち、自主的にやっつかねばなりません。そして、この信徒としての「開示」は、同じくパウロが言うとおり、「たとえ、人々の異言（ここでは“言葉”の意味）、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいドラ、やかましいシンバル（13・1）。……愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。（13・4—7）」ということを念頭におき、進めなければなりません。

皆さん、「蛤御門の変」の時、奇兵隊の高杉晋作が大変慎重派だったので、同志から「百五十石の米粒がお前の足の裏についてるんだらう。だから動けない。」などと罵倒されたそうです。私たちは固定観念という糊を洗い落として、フットワーク軽く、自主性を発揮し、働こうではありませんか。私たち（私？）は、どうしても Omission（怠慢の罪）（in what I have failed to do）に陥りがちです。不作為も、事勿れ主義も避けなければなりません。「信徒の教会」とはこう云うことかなと考えました。

取り留めの無い小文をしたためました。書き終わり、フト気がつくと、投宿した浅間温泉の旅館の庭先でウグイスが来て鳴いています。室町時代の本願寺蓮如上人ではないですが、「法に聞け、法に聞け」と……。





## みんなの広場

みなさまの分かち合いの場になれば、と「みんなの広場」を設けました。みなさまから原稿を頂戴しなければ成立しないコーナーです。どうぞご参加下さい。

### 地区会について

六甲教会は創立以来、壮年会、婦人会、青年会など信者の性別、年齢別に区分され、信徒の親睦、教会の諸活動に努めてきましたが、昭和 61 年着任のオマリー神父のご希望で、地区会が創られました。設立後、約 20 年経ちましたが、その活動は教会近隣の地区に限られ、しかも地区内の信徒の親睦を主業務にしているようで、教会の諸活動は相変わらず、壮年会、婦人会中心に行われているようです。

この間、日本の社会は大きく変わり、教会でも神父の高齢化と人数の減少が進み、信徒自身の祭儀、布教の促進が大きな課題になって来ました。

この状況を考え、私は地区会の主業務は宣教にあり、現在はその目的達成に邁進すべき時であると痛感し、以下にその理由、具体策を書き記すことにしました。

現在、われわれの周りには一人暮らしの老人で満ち溢れ、また犯罪の多発などで、隣家のことに無関心でおれなくなりつつあり、戦争中の町内会、隣組のような制度の設立、運営が必要な時代になってきました。しかし戦後拮据がった個人主義、最近制定された個人情報保護法もあって、かかる制度は話題にも上がらず、老人や犯罪問題の多発は放置されたままです。その状態を思う時、我々カトリック信徒は率先して、近くの一人暮らしの老人訪問や防犯制度の設立などに励み、「汝の隣人を愛せよ」と言われたイエスの言葉を実践に励むべき時ではないでしょうか。

教会内でこの行動を起こしうるのは、壮年会や婦人会でなく、地区会であることは明白であり、私はこれらを地区会の主業務にしなければならないと考えます。

具体策としては、私の過去の経験や最近テレビで観た近隣運動から以下のように提案します。

1. 地区会の会合時に、地区内の民生委員や既に「老人訪問活動」などをしておられる方々のご出席をお願いし、地区内の一人暮らしの老人の人数や生活状況の説明を受け、未信者の方も誘い、地区内の信徒などで訪問出来る老人や訪問方法を決め、定期的にそれらの方々を訪ね、民生委員などのお手伝いをする。
2. 地区会の会合時に警察、または消防関係者のご出席をお願いし、地区内の防犯や救急活動の説明を受け、協力出来る体勢を創り、その必要時に地区会の信徒が率先し、未信者の方を誘って、警察や消防署に協力する。また定期的にその訓練をする制度を作る。

上記の活動は、カトリックの宣教とは直接は結びつきませんが、まず近隣の未信者との親交が深まり、その中に宣教に結びつくことは明らかです。上記の活動は地区の面積が広大で、信徒がまばらな地区では実施困難です。私はかかる地区は、地区会を解散しても良いと考えています。その代わり年に 1 回、各地区代表が集まり、各地区の活動を話し合う地区総会を開き、この会に無地区会の信徒は出来る限り出席し、老人訪問、防犯や救急活動のテクニックを学び、個人として積極的に近隣の未信者と協力して、それらの活動を行うようにする。

以上の提案の実施にはいろいろな問題もあると思いますが、私はかつて民生委員に協力して、一人暮らしの老人訪問を定期的に行う活動をした経験があり、関係の役所と提携した活動は、プライバシー問題も少なく、カトリック信者が率先して行うことは実現可能であり、また信徒宣教の第 1 歩になると考えています。

とにかく実現可能と思われる地区で、テストケースとして行い、次第に六甲教会の全地区会へ広げようと思ったら良いと思うのですが。

(小 林)

「ペトロ岐部他 187 名列福」記念講演  
五野井 隆史先生 講演「日本人とキリスト教の出会い」を聞いて

当時の日本人がキリスト教を受け入れた要因に、応仁の乱で荒廃した社会事情が指摘された。このことは民衆に宗教への目を向けさせた。同時に布教に対して難しい問題も作っていたようだ。末世思想が広まり、民衆の心には絶望感が広がっていた。物心両面で苦しんだ民衆は仏教に救いを求めたが、仏教も救いを示せなかった。すがったのは数珠や護符であった。キリスト教に入信すると、コンタツ（ロザリオ）やメダイなどの信心具を珍重したということも肯ける。布教における一番の問題は民衆の絶望感を取り除き、救霊の信仰を示すことであった。難しかったが、徐々に受けとめられるようになる。社会で苦しむ民衆を救うべく仏教の僧侶も苦悩する。そうした僧侶が仏教思想に限界を感じ、キリスト教に帰依した例も示された。しかし、実績も実体もない教会を仏僧が訪ねてくるだろうか。

ザビエルとともに日本にきたトルレス神父のローマへの報告に教会に来る貧しい人々に教理を教え、施し(ほどこし)として「銭一枚」が与えられたことが記されている。この「銭一枚」の出所は最初は教会だったかもしれない。さらに、教会は西洋の医術、医薬によって、訪れる人の病を治した。このようにして徐々に教会に人々が集る。そしてキリストの教えを信じ、信徒同士の「施し」が行なわれるような共同体が形成されて行く。このように受け取るとお話は大変説得力があると思えた。

その後の発展の中で神父たちの活躍はもちろんだが、一般の信徒がいろいろな形で教えを広めていった例が示された。印象的なのは山口の針櫛行商人のマテウス。「あなたがなすべきことは、あなたが悪いとおもわれることは行なわず、あなたの善しと考えることであって、これがすべてである。自分はこれ以外には何も知らない」とだけ話して信徒を増やしたという。このマテウスなる人物には人徳があったのだろう。こうした一般信徒の福音宣教が成功したと知る時、現代社会において我々に必要なことは何かを考えてみなければと思った。(桐原)

oooooooooooooooooooo **壮年会・婦人会 合同例会** 7月27日(日) ooooooooooooooooooooo

7月27日(日)壮年会と婦人会の合同例会が開かれました。今回の合同例会は「イタリア美術とキリスト教」というタイトルでスライド鑑賞と講演を聴きました。講師は壮年会の柗木久和さんです。何回もイタリアに足を運び、羨ましいことにこの春も奥様と一緒に長期滞在してこられました。蒐集された豊富な資料などを大型のスクリーン一杯に映し出して、大変親しみやすく軽妙なお話をして下さいました。以前、私もイタリアでジョット、ダヴィンチ、ミケランジェロなどいくつか実際に美術品を見学しましたが、柗木さんの解説を聴くともう一度行って、改めてしっかり見たいと思いました。アマチュア美術史家らしくご自分の意見を率直に述べ、自由なお話を繰り広げられ、「キリスト教美術は現地の教会で鑑賞するのが一番」という結論におおいに拍手が沸きました。また、スライドの中にちらりと紹介された、イタリアの工房で奥様と一緒に制作されたというモザイク作品もなかなかのものでした。その後、さんさんと輝く真夏の太陽のもと、バーベキュー大会に移り、駐車場に張られたテントの中で焼いたお肉や野菜をほおばり、飲み物でのどをうるおし、おしゃべりに興じました。炎天下で火を起し設営のお世話下さった方々、ほんとうにご苦労さまでしたと感謝申し上げます。楽しい一日でした。(詫)



柗木氏の軽妙な話に熱心に聴き入る人達



お陰さまで昨年に引き続き、今年も合同例会を開催することができました。今年は午前の講演会、午後のバーベキューとちょっとビッグな合同例会でした。講演は壮年会メンバーの柁木さんに「イタリア美術とキリスト教」と題して熱く語っていただきました。

110名を超える聴衆でイグナチオホールが溢れんばかりとなりました。ルネッサンスの絵画を中心に笑いも入れての一時間半にわたる熱演でした。宗教画は美術館よりも信仰が生きている教会にあるほうがずっと良い。教会祭壇にあったグイド・レーニの磔刑図を眺めていてまるでキリストが自分に迫ってくるような感じがして胸が熱くなったとの締めくくりには私も胸が熱くなりました。ご自身は「紙芝居のおじさんや」と仰っていましたが、いやいやなかなかのものでした。ブラーボー！です。また続編をお願いします。ありがとうございました。

さて、午後からは気温も上がり猛暑の中でのバーベキューでした。参加者は80名を超え、初参加の方もおられましたし、また若い青年グループにも多数参加いただきました。熱いあつい炭の前でバーベキューして頂いた方々本当にご苦労様でした。

受付・会計とお茶におにぎりそしてその他細かなところにまで気を配っていただいた婦人会役員の皆様お礼申し上げます。私たちのカトリック六甲教会、この教会での老若男女の融合を願って止まない一人として今年もいい合同例会であったと思っています。皆様に感謝申し上げます。有難うございました。  
(壮年会 川合)

肉や野菜を焼きながら、暑さとの戦いです。



多数の青年たちも参加して。



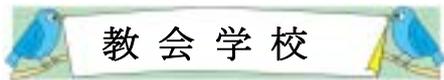
## 主任司祭の地平線



暑い！暑い！と、ぼやいているうちに秋がやって来て、夏の暑さを忘れるのが人間でしょうか。しかし、今年は異常気象かと思えるほどの猛暑と局部的豪雨だったようです。私たちは地球家族として、またこれからの子供や孫たちの時代を考えると、**地球温暖化に対する意識と努力**は必要だと反省させられました。蚊帳・うちわ・蚊取線香などで過ごせた時代が懐かしいです。パソコンや携帯電話も無かったので、もっと人と人の心が通い合っていたと思います。教会学校と中高生会のキャンプは、そのようなお互いの心のつながりや仲間意識をテーマにしました。雑木林でのにぎやかな食卓・テント宿泊・朝の折りや体操・キャンプファイヤーや星空観察など大自然の中で過ごした3泊4日の体験で、子供たちもリーダーたちも大きな自信と“共に生きて行く喜び”を感じたことでしょう。

8月の平和旬間の折りや集会に参加された多くの方々も地球家族の平和を真剣に願いながら、同時に“心の平和”(信仰の恵み)ほど大切なものはないと実感されたのではないのでしょうか。神様につながっている心、人と人がつながっている心をもって、教会の秋を迎えたいと思います。





## 教会学校



### 「夏のキャンプ」に参加して

教会学校のキャンプに初参加させてもらった。教会学校リーダーの吉村光基君から参加の誘いを受けたのがそのキッカケで、皿洗いなど何でもと思っていたが、班担当のリーダーの一員としての参加であった。8班からなる66人の子供たち、30人のリーダーそして10人の炊事班スタッフあわせて総勢100人を超えた。3泊4日、星空観察・山登り・キャンプファイヤーなど8個のプログラムが用意されていた。リーダーのほとんどが大学生と若い社会人であった。そして信者でない方もいた。リーダー、スタッフの一日は朝5時半ごろの起床から始まった。大汗をかきながら子供たちと一緒に考えたり、思ったり、感じたりそして遊んだ。8個のプログラムそれぞれにキャンプのテーマ「みんな」そして「感謝とゆるし」が刻まれていた。子供たちへ、リーダー仲間へそして自分自身への福音宣言だと思った。キャンプの準備、企画には大変な苦労があったと思う。そしてキャンプ中の若者たちのひた向きでエネルギー溢る姿に接し、六甲教会にこんなに頼もしい若者たちが沢山いたのだと認識させられた。加えて、これまで教会学校発展のため尽くしてきた若いリーダーOBたちの存在も忘れてはならないことも。

炊事班を2020年以上も受け持ってきてくださっているご夫婦がおられた。中出さんご夫妻。炊事班なくしてキャンプはできない。計り知れない重さを持つこの奉仕にただただ頭が下がった。今回の教会学校キャンプに壮年会からは、藤原(睦)、古結、中口、福田さんそして私の5人が初参加した。皆さん異口同音に若者たちと協力し合えたことを喜んでおられる。私も、六甲教会における老若・壮青の更なる融合を望んでいる者の一人として今回の教会学校夏のキャンプに参加し協力させていただけたことに感謝している。(壮年会 川合)

### 「教会のキャンプで初めてとったクワガタ」



5年 秋田

ぼくがキャンプで思い出に残ったことは、教会のキャンプで初めてクワガタをとった事でした。クワガタなどにくわしいお食事リーダーと、朝の5じぐらいに集会所に集まって、カブト虫やクワガタ虫などが木にとまっていなかったか、さがしにいきました。でも、その日はだれもつかまえられませんでした。でも、お食事リーダーは、もっと早い時間に起きて、クワガタのメスを二ひきつかまえていました。ぼくは「すごいな」と思い、ぼくも見つけないとおもいました。だけど、次の日も次の日も見つけれませんでした。そしてプログラムの登山で、登るときはとてもたいへんでしたが、ちょうじょうはずしくて、気持ちがよかったです。おりるときに、道のはしっこのほうで黒いものがおちているので拾いあげるとそれは、なんと、幸運な事にクワガタのメスでした。かた手にクワガタをのせておりました。これがぼくの初めてとったクワガタのとりかたです。

### 「サイコーのキャンプ」

6年 吉田

私は、1年生の時に行っているキャンプの中で、今年が一番楽しく、仲良く過ごせたとおもいます。8月5日、今年1年生になった弟と4年生の妹とイグナチオホールに向かいました。たくさんの方が来ていて、とてもござわざわしてました。今年最高学年で班長なので、とにかく楽しいキャンプにしようと思いながらバスへ移動しました。下に大きい荷物を積んで中に乗りました。バスの中では歌をうたったり、おしゃべりしたり、ねてました。兎野高原に着いて、テントに荷物を置き、お母さんが作ってくれたお弁当を食べました。次に班分けがありました。班が発表されて私は正直心配でした。理由は低学年が多く、ほとんどの子を知らなかったからです。「これから3泊4

日、どんな生活になるかな。」と不安になりました。でも今思うと、全然心配する必要はなかったです。

朝の体操は去年まで「エビ・カニ体操」だったけど、新しく「イカ・イルカ体操」が出来て、始めは「エー。エビ・カニがいい。」って思ってたけど「イカ・イルカ」もけっこう楽しかったです。4日目の朝に5・6年が前に出て踊ったくらい気に入りました。

この3泊4日で班の中でけんかや大きなけがもなく、みんな仲良く遊べたので、2日目に班で決めた憲法「人の話をしっかり聞いて、みんなで仲良く楽しく遊ぶ、笑顔がいっぱいの二班G2（元気な2班）」はちゃんと守れたと思います。それに班の子達が私よりてきぱき動いてくれて、とても助かりました。私が一番うれしかったのが、友達になりたいと思っていた子と仲良くなれたし、新しい友達もたくさん出来た事です。小学校最後のキャンプ、サイコーのおもいでです。



イカ・イルカ体操



ごミサ



林間の中で昼食



### 「広島平和への道」に参加して

8月5日10時30分、すでに容赦なくぎらぎら熱射を放つ太陽に迎えられた広島駅。

市電に乗り『原爆ドーム前』で下車。ドーム公園の正面入口では、核廃絶署名活動を行っている長崎の高校生達との出会い。

シナピス神戸のスタッフの方が準備された、平和公園周辺ガイドを手にくいつかの慰霊碑の前で平和の祈りを捧げながら巡ります。被爆直後は草木も育つ事がないだろうと言われていた広島のみ。中州には多くの木々が育ち、その間を川風が吹きぬけ、市民の、訪問者の憩いの場となっている美しい『平和公園』ですが、今年は神戸と同じ蒸し暑さの中、市民ボランティアの女性がバケツと雑巾を持ち、ベンチを一台、一台拭いて回られている姿を目にし、思わずお礼を申し上げました。

『原爆資料館』核のパネル展示前では多くの若者や外国からの訪問者が熱心に足を止めています。館内ガイド・ボランティアの方が、各展示の前で聞き手を大切にしたりわかりやすい説明が聞こえてきます。被爆物の展示の前で、2人の小学生が、お母さんからの詳しい解説に頷いて聞いています。

午後の『原爆死没者慰霊碑』前では、翌日6日に行われる平和式典のリハーサルが行われています。式典の間の音楽は市内高校吹奏楽部の生徒による演奏、小学生の平和への誓いの言葉、市長の世界へ向けたメッセージ、献花などなど。

『国立広島原爆死没者追悼平和祈念館』爆心地付近から見た広島市街をパノラマで表現し、それぞれが追悼祈念静かに出来ます。モニターを使い、死没者の遺影、名簿の公開、体験記が展示コーナー検索装置で一般公開されています。

研修室ではボランティアの方による、体験記朗読会の5回のプログラム（英語を含む）が組まれ

ており、ゆっくりと静かに私達聴者の心に染みとおるように読んでいかれます。どの体験記も、熱で焼け溶けた皮膚と肉、「みず……みず……」の叫びや異臭、肉親との別れ、悲惨な様子が描かれています。最後に、聴者全員で詩の朗読体験では、最初の音を発しただけで声になりませんでした。

『原爆供養塔』午後5時30分、全国のカトリック教区、広島聖公会の信徒、クロアチアから来訪された司教様と信徒代表の方と共に、平和の祈りを捧げ、『世界平和祈念聖堂』に向けて聖歌行進。私達の大阪教区は、4日間の広島合宿を体験中の若者達によってリードされ、行進の列には池長大司教様、松浦司教様が加われ、広島県警の多数の若い警察官に安全誘導されながら、無事に大聖堂に到着。広島教区の信徒の皆様の準備してくださった冷たいお水を一気に飲み干し、聖堂の入口で「核燃料再処理工場廃止」のチラシを配っておられる懐かしい援助会のシスター達と握手で再会。



聖堂に入り、朝から目にした様々なことを静かに思い起こしました。広島は生きています。活かされています。広島の街は、一人一人の市民から世界に向けて確実な平和アピールが成されている事を私達は実感する事ができました。

若者の不可解な行動が問われている昨今ですが、広島には世界中から多くの若者が訪れている様子を見て、神の御手の力強さを感じる事ができました。「平和への道」は若者達によって受け継がれ共に歩める事を願い、感謝の思いでミサに与りました。  
(貴 島)



## 神戸地区 平和旬間行事 『平和のいのり』

8月9日(土) 神戸地区平和旬間行事『平和のいのり』が住吉教会において13時から行われた。Nさん(六甲教会)の清らかな独唱『アヴェマリア』『シャローム』は 参加者を祈りへ誘い、平和の詩の朗読へと続き、第1部へと促される。

シナピス神戸は、2ヶ月前平和旬間準備として、アシジの聖フランシスコ「平和を求める祈り」の各行を各小教区に割り当て、各小教区は 割り当てられた祈りを実現する具体的活動を行なってきた。その発表がされた。どの小教区も平和を心から望み、真剣に取り組んだ熱意が伝わる。中でも住吉教会の子供達の取り組み、発表は心に残るものがあった。各小教区の共同祈願は会場の人々全員で唱えられた。



第2部は『山口ブラザーズバンド』の演奏とお喋り。リズムと歌詞に含まれる愛と平和へのメッセージは会場にいた人々の心を高揚させた。山口神父は長崎・広島巡礼体験メッセージ、フランシスコが大切にしていた自然への慈しみと平和の願いの推進を訴えた。

世界では国の威信・利益が優先し、戦争がおこなわれている。世界の平和が脅かされ、快適な生活を口実に環境破壊が進んでいる現代、平和と自然に対するフランシスコの考えと行動の意義を再認識させる集会であった。  
(平和子)





「ナウエンと読む福音書」

ヘンリ・ナウエン著（あめんどう刊 2008 年）

ナウエンは 1996 年に亡くなりましたが、この著作はナウエンのハーバード大学時代の同僚であったマイケル・オラーリンがナウエンの多くの著書の中から福音書の核心部分について書かれた箇所を編集してまとめたものです。ナウエンが好んだ同じオランダ人のレンブラントの素描がたくさん入っていることもこの本の魅力です。

巻頭に「福音のメッセージの全容が示すものは、『イエスのようになる』ということです」と記されています。ナウエンが彼の読者にもっとも伝えたかった思いを簡潔に表している言葉だと思います。

ナウエンは、福音書を読む人たちがイエスと出会うことによって「神の福音との出会い」へと歩み入ることを願っています。ですから福音書の解説をすることよりも、

読者がイエスとじかに出会うことが出来るようにと語りかけます。

神の子としての自由を生きたイエスは、私たちにも同じ自由を生きようとして招かれます。その障害となるものを乗り越えるように招いてくださっていることをナウエンは解き明かしつつ、前に向かって進み行く道を示しています。ナウエン自身が悩みや迷いを受け止めつつ歩んだ中からの心のこもった励ましが書かれています。

ナウエンはカトリック司祭でしたが、その著作の多くはプロテスタントの出版社から日本語訳が出されています。女子パウロ会のものも含めて 30 冊以上が翻訳されています。日本人のクリスチャンへの大切なメッセージがあります。一読をお勧めします。  
(吉村)

教会報 8 月号の 10 ページ Kakubu 紹介の「図書室」の柴田さんの原稿で、下記の部分に入力ミスがありました。訂正してお詫び申し上げます。  
(広報部 編集担当)

一行目	(誤)	信仰には本(学問、教養)などいない、妨げにさえなる。という諭し、嘆きのことばが洋の東西を問わずあります
	(正)	信仰には本(学問、教養)などいない、妨げにさえなる、 <u>という諭し、<u>というか</u>嘆きのことばが洋の東西を問わずあります。</u>
二行目	(誤)	(「八万の法蔵を知るも愚者、一文も智者」 蓮如
	(正)	(「八万の法蔵を知るも愚者、一文 <u>不知</u> でも智者」 蓮如)
十二行目	(誤)	ある程度総花的なコレクションになるのは止む得ない所です。
	(正)	ある程度総花的なコレクションになるのは止む <u>を</u> えない所です。

## 9 月 の 予 定

日	曜	教会暦	教会行事
3	水	聖グレゴリオ一世教皇教会博士	
5	金		初金 7:00 10:00 ミサ 婦人会例会
7	日	年間第23主日	14:00 結婚準備セミナー開始(9/28まで) 14:00 神戸地区評議会
8	月	聖マリアの誕生	
10	水	日本205福者殉教者	
13	土	聖ヨハネ・クリストモ司教教会博士	14:30 教会学校 始業式
14	日	十字架賞賛	秋の墓参 (9時ミサ後) 17:00 海星病院集会祭儀
15	月	悲しみの聖母	13:00 三日月会 ミサと総会
16	火	聖コルネリオ教皇 聖チプリアノ司教殉教者	
18	木		14:00 ベタニアの集い
20	土	聖アンデレ金と同士殉教者	13:00 雨宮神父の聖書講演会 14:00 片柳助祭の司祭叙階式(東京)
21	日	年間第25主日	7:00 10:00ミサ(片柳新司祭初ミサ) 13:00 雨宮神父の聖書講演会 14:00 東ブロック会合
22	月		11:00 ベビーとママの集い
23	火	聖ピオ(ピエトルチーナ)司祭	
27	土	聖ピンセンチオ・ア・パウロ司祭	10:00 集会祭儀司式者養成コース(最終)
28	日	年間第26主日 世界難民移住移動者の日	17:00 海星病院集会祭儀
29	月	聖ミカエル、聖ガブリエル、聖ラファエル大天使	
30	火	聖ヒエロニモ司祭教会博士	

### 編集委員のつぶやき

今年の「納涼の夕べ」は天気に関わされた。夕方からほぼ 70%近い降雨予報に、急遽会場も室内に移したけれど、午後 5 時頃からは嘘のように一滴の雨も降らず、片付けが終わった途端、激しい雷雨に見舞われた。いつものように壮年会、婦人会、青年会が「焼き鳥」や「焼きそば」、「お寿司」、「綿菓子」、「カキ氷」等を販売。室内では子どもたちがゲームに興じ、ホールで大人たちが青年やプロのジャズバンドの演奏に聴き惚れる非日常的な空間。



ファイナレーは子供達の合唱で

暑い夏の諸々の行事もこれで終わり、秋風が立ち始めると、教会の庭にも秋の草花が咲き始め、人々の心を癒してくれる。( T . H )

教会報 10月号の発行は、9月28日(日)です。

編集会議は9月21日(日)です。

記事原稿は、9月14日(日)正午までに信徒会館事務室へご提出願います。(広報部)

<http://www.rokko-catholic.jp>

**カ ト リ ッ ク 六 甲 教 会**

〒657-0061 神戸市灘区赤松町 3-1-21

電 話 0 7 8 - 8 5 1 - 2 8 4 6

F A X 0 7 8 - 8 5 1 - 9 0 2 3

発行責任者 桜 井 彦 孝 神 父

編 集 広 報 部